

## 9 節 聖書解釈の原則

9 聖書自身を解釈するのに誤ることのない規準は聖書自身である。したがって、いかなる聖句であれ、その真の完全な意味（それは多様でなく、一つである）について疑問があるときには、それは、もっと明瞭に語っている他の幾つかの箇所によって調べられ、知られなければならない。

「何よりもまず心得てほしいのは、聖書の預言は何一つ、自分勝手には解釈すべきではないということです。なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです。」 共

ペテロの手紙 二 1・20,21

「預言者たちのことばもこれと一致しており、それにはこう書いてあります。

『この後、わたしは帰って来て、  
倒れたダビデの幕屋を建て直す。  
すなわち、廃墟と化した幕屋を建て直し、  
それを元通りにする。』

」 改

使徒の働き 15・15,16

異邦人伝道の正当性を、旧約のアモス書9・11、エレミヤ書12・15から引用している。

「滅亡したダビデ王国は、ダビデの子であるイエス・キリストの十字架と復活により、霊のイスラエルである教会として復興され、キリストの弟子たちの伝道により、異邦人も主を信じるようになった。

た。」《脚注》

この9節は、聖書解釈の二つの原則を示している。

1．聖書解釈は、文法的・歴史的解釈であること。

「著者がその時代に用い、読者がその時代に用いた意味で聖書の言葉の意味を考え、著者が言おうとしている真意を読み取るべきで、こちらからの持ち込み解釈をしない。」《講解》

「ローマ・カトリック教会は、しばしば自己の教理の根拠を置こうとして、こじつけ的な解釈を下す。……これに対して、私たちは文法的、歴史的方法を主張する。すなわち、字義通りに前後の文脈から、書いた人の歴史的事情に照らして、本来のままの心を読むべきである。」《解説》

2．聖書が聖書を解釈するという原則。

「分かりにくい聖書の箇所は、もっと分かりやすい聖書の箇所の光に照らして解釈するという原理」《講解》

「聖書が自己完結的啓示であると考え、聖書を直接的靈感や伝説、経典外文書などの助けを得て、はじめて理解できると見ることは誤りである。聖書の理解が困難な箇所は、より明白な箇所の光に照らして理解すべきで、同じ語、同じ問題はよりはっきりしている他の聖句に基いて推論すべきであるというのである。」《解説》